



平成16年度文化庁日本語教育大会
(関西大会)

平成16年11月14日(日)

大阪大学コンベンションセンター

主 催  文化庁

協 力 大 阪 大 学

目 次

○プログラム	2
○開会あいさつ	4
○講 演	6
○座談会	8
○日本語教育研究協議会	13
・第1分科会	14
・第2分科会	22
・第3分科会	28
・第4分科会	34

プログラム

- テーマ：「言葉と文化－言葉から見る日本と韓国の文化－」
- 趣 旨：言葉は、意思疎通の手段であると同時に、その言葉を母語とする人々の文化とも深く結びついている。本大会では、2005年に迎える日韓国交正常化40周年を前に、近年、映画・TVドラマなどの大衆文化の交流を通じて、国民の興味や関心が高まっている韓国語を事例として取り上げ、日本語の場合と比較対照しながら、言語表現及び非言語表現に見られるそれぞれの文化パターンの一端をさまざまな観点から考察し、もって、日本語の支援活動における異文化理解、寛容性、判断留保（エポケー）等の重要性についての認識を深める。

10:00 開会【MOホール】

○あいさつ

10:10～11:10 講演【MOホール】

○テーマ：「日本と韓国の文化交流体験の醍醐味」
○講演者：平田 オリザ（劇作家・演出家）

11:15～12:30 座談会【MOホール】

○テーマ：「日本語を外から眺める－言語の視点から見る日本と韓国の文化交流－」
○進行役：水谷 修（名古屋外国語大学長）
○座談者：井出里咲子（筑波大学講師）
 李 徳 奉（韓国・同徳女子大学教授，韓国日本学会前会長）
 小倉 紀 蔵（東海大学助教授）
 平田オリザ（劇作家・演出家）

13:30～16:00 日本語教育研究協議会

第1分科会【会議室1】

- テーマ：「日本語・韓国語などの対照言語研究の成果の活用」
- 講師：生越直樹（東京大学教授）

第2分科会【会議室2】

- テーマ：「音声・音韻の対照言語研究の成果の活用」
- 講師：松崎 寛（広島大学講師）

第3分科会【MOホール】

- テーマ：「異文化間カウンセリングの活用 -判断留保（エポケー）の実践-」
- 講師：渡辺文夫（上智大学教授）

第4分科会【会議室3】

- テーマ：「年少者の日本語習得について考える」
- 講師：中島和子（名古屋外国語大学教授）

16:00 閉会

（五十音順，敬称略）

《御案内》

- ・ コンベンションセンター内での喫煙または飲食は，1階ラウンジコーナーを除き，御遠慮ください。
- ・ 11:00～19:00の間，医学部附属病院（パンフレット裏の「吹田キャンパス構内図」参照）1階の食堂が営業しています。（特別に，一般来館者用食堂の隣の職員食堂の場所も御利用いただけます。）
- ・ タクシー
阪急タクシー：06-6864-1111 三菱タクシー：06-6906-0066
日本タクシー：06-6928-5151

■開会あいさつ

<メモ>

- テーマ：「日本と韓国の文化交流体験の醍醐味」
 ○趣旨：講演者の韓国留学の経験や、韓国人との演劇活動の体験（2002年の舞台演劇「その河をこえて、五月」で韓国人と共同脚本・共同演出を手がけられた。）などをもとに、言葉や言語行動にみられる日本・韓国のそれぞれの文化の特徴や、異文化間における「対話」「交流」の醍醐味等について話していただく。
 ○講演者：平田 オリザ（劇作家・演出家） （敬称略）

平田 オリザ（ひらた おりざ）

劇作家・演出家・桜美林大学文学部総合文化学科助教授

略歴等：国際基督教大学教養学部卒業後、在学中に結成した劇団「青年団」を率いて、自ら支配人をつとめるこまばアゴラ劇場を拠点に活動、「現代口語演劇理論」を確立する。1995年『東京ノート』で第39回岸田國士戯曲賞を受賞。1997年『月の岬』（作：松田正隆／演出：平田オリザ）で第5回読売演劇大賞最優秀作品賞・優秀演出家賞を受賞。2003年、日韓国民交流記念事業『その河をこえて、五月』（新国立劇場制作）で、第2回朝日舞台芸術賞グランプリを受賞。近年は海外演劇人との合同プロジェクトや、国内外で多数行っている演劇ワークショップでも注目を集めている。

2002年度より中学2年生の教科書「現代の国語」（三省堂）に、ワークショップの方法論が導入され「対話劇を体験しよう」という学習教材となる。

現在、文化庁が実施する日韓文化交流事業の芸術文化アドバイザー、富士見市民文化会館キラリ☆ふじみ芸術監督、三省堂小学校国語教科書編集委員、（財）地域創造理事もつとめる。

主著書：『演劇入門』『演技と演出』（以上講談社新書）

『芸術立国論』（集英社新書）

『話言葉の日本語』（共著、小学館） 他



<メモ>

- テーマ：「日本語を外から眺める ―言語の視点から見る日本と韓国の文化交流―」
- 趣旨：日本語を韓国人の視点から、また、韓国語を日本人の視点から眺め、それぞれの言語文化の魅力や共通点や特徴を探る。また、韓国人を戸惑わせる日本人の言語行動や、日本人を戸惑わせる韓国人の言語行動についても語り合い、交流の意義や異文化コミュニケーションの醍醐味について考える。
- 進行役：水谷 修（名古屋外国語大学長）
- 座談者：井出里咲子（筑波大学講師）
 李 徳 奉（韓国・同徳女子大学教授、韓国日本学会前会長）
 小 倉 紀 蔵（東海大学助教授）
 平田オリザ（劇作家・演出家）
- （敬称略）

<進行役>

水 谷 修（みづたに おさむ）

名古屋外国語大学長

専 門：日本語教育、国語学

略歴等：国際基督教大学助手、千葉大学講師、スタンフォード大学日本研究センター語学主任、同副所長、国立国語研究所日本語教育部日本語教育研究室長、名古屋大学総合言語センター教授、国立国語研究所日本語教育センター長、国立国語研究所所長、名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科長を経て、2002年4月から現職。第21期（第2委員会主査）及び第22期（第3委員会「国際社会に対応する日本語の在り方」主査）国語審議会委員、日本語教育学会会長などを歴任。

また、1999年度文化庁「日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議」及び2000年度文化庁「日本語教育のための試験の改善に関する調査研究協力者会議」の座長を務めた。現在、NHK放送用語委員会委員、日本学術会議会員、文化審議会の国語分科会委員等を務めている。

主著書：『はなしことばと日本人（日本語の生態）』（創拓社）

（'Japanese: The Spoken Language in Japanese Life'）

'An Introduction to Modern Japanese' JAPAN TIMES

'Nihongo Notes' JAPAN TIMES 他



<座談者>

井出里咲子(いで りさこ)

筑波大学社会科学部国際政治経済学専攻講師

専門：言語人類学，社会言語学

略歴等：日本女子大学英文学科を卒業後，テキサス州立大学オースティン校人類学部言語人類学専攻博士課程終了。韓国中央大学校文科大学日語・日文学科専任講師（1998～2000），米国バツサー大学アジア研究研究科客員助教授（2000～2002）を経て，2002年8月より現職。

主著書：『箸とチョッカラク：ことばと文化の日韓比較』（共著：大修館書店）
'Small talk' in Service encounters: The creation of self and communal space through talk in America. (1998, テキサス大学博士論文)

'Sorry for your kindness: Japanese interactional ritual in public spaces' Journal of Pragmatics Vol29. (1998) 他



李 徳 奉(いー とくぼん)

韓国・同徳女子大学外国語学部教授

専門：日本語教育，認知意味論（心理言語学）

略歴等：筑波大学大学院文芸言語研究科博士課程修了。韓国日本学会14-15代会長を歴任。韓国の日本語教育政策に20年間研究陣として参加。2004年度国際交流基金奨励賞日本語教育賞受賞。

主著書：『メタファーの心理学』（共著，誠信書房，1990）
『新日本語学の理解』（共著，時事日本語社，1998）
『日本語教育の理論と方法』（時事日本語社，1998）
『総合的日本語教育を求めて』（共編，国書刊行会，2002）
『比喩の意味論的研究』（博士論文，1995） 他



小倉紀蔵(おぐら きぞう)

東海大学外国語教育センター助教授

専門：韓国哲学

略歴等：東京大学文学部卒業。ソウル大学大学院博士課程単位取得。東海大学専任講師を経て1999年4月より現職。

2004年5月より外務省「日韓友情年2005」の実行委員を務めている。

主著書：『韓国は一個の哲学である』（単著：講談社現代新書）
『韓国人のしくみ』（単著：講談社現代新書）
『韓国語はじめての一步』（単著：ちくま新書）
『韓国、ひき裂かれるコスモス』（単著：平凡社）
『韓国ドラマ、愛の方程式』（単著：ポプラ社）
『韓国学のすべて』（編著：新書館）
『最もシンプルな韓国語マニュアル』（単著：アルク）
『カジュアルハングル講座』（単著：DHC）



平田オリザ (ひらた おりざ)

劇作家・演出家・桜美林大学文学部総合文化学科助教授

略歴等：国際基督教大学教養学部卒業後、在学中に結成した劇団「青年団」を率いて、自ら支配人をつとめるこまばアゴラ劇場を拠点に活動、「現代口語演劇理論」を確立する。1995年『東京ノート』で第39回岸田國士戯曲賞を受賞。1997年『月の岬』（作：松田正隆／演出：平田オリザ）で第5回読売演劇大賞最優秀作品賞・優秀演出家賞を受賞。2003年、日韓国民交流記念事業『その河をこえて、五月』（新国立劇場制作）で、第2回朝日舞台芸術賞グランプリを受賞。近年は海外演劇人との合同プロジェクトや、国内外で多数行っている演劇ワークショップでも注目を集めている。

2002年度より中学2年生の教科書「現代の国語」（三省堂）に、ワークショップの方法論が導入され「対話劇を体験しよう」という学習教材となる。

現在、文化庁が実施する日韓文化交流事業の芸術文化アドバイザー、富士見市民文化会館キラリ☆ふじみ芸術監督、三省堂小学校国語教科書編集委員、(財)地域創造理事もつとめる。

主著書：『演劇入門』『演技と演出』（以上講談社新書）

『芸術立国論』（集英社新書）

『話言葉の日本語』（共著、小学館） 他



<メモ>

<メモ>

【4 室 館 全】

日本語教育研究協議会 (分 科 会)

○テーマ：「日本語・韓国語などの対照言語研究の成果の活用」

○趣旨：日本語と韓国語の対照研究の成果を解説しつつ、日韓の文化間で起こりやすい誤解の事例を幾つか挙げていただきながら、文化摩擦を最小限にとどめる方策や、こうした知見の日本語教育現場での活用方法について、多様な観点から考える。同様に他の言語（ポルトガル語や中国語など）についても、対照言語研究の成果について可能な限り触れていただき、その知見の活用方法について協議する。

○講師：生越直樹（東京大学教授）

（敬称略）

生越直樹（おごし なおき）

東京大学大学院総合文化研究科教授

専門：朝鮮語学，社会言語学

略歴等：大阪外国語大学大学院修了，大阪大学大学院中退。横浜国立大学助教授，国立国語研究所室長，東京大学助教授を経て，2003年より現職。教養学部で韓国朝鮮語の授業，大学院総合文化研究科で日韓対照研究の授業を担当。

主著書：「日本語・朝鮮語における連体修飾表現の使われ方—「きれいな花！」タイプの文を中心に—」『シリーズ言語科学 第4巻 対照言語学』（生越直樹編，東京大学出版会，2002.11）

『韓国朝鮮語初級テキスト ことばの架け橋』（チョ・ヒチョル氏と共著，白帝社，2000.9） 他



<メモ>

<メモ>

「誤解の事例から考える日韓の言語行動 —日本語・韓国語などの対照言語研究の成果の活用—」

1. 言語行動とは

言語行動とは — 具体的な場面において、ある言語形式、あるいは言語記号が選択され使用されて、それによって起こる伝達行動 (野元菊雄(1983))

◎言語行動の観点からの日韓対照研究

文法的に間違いがなくてもミス・コミュニケーションが起きる。



日本人と韓国人とのミス・コミュニケーション(誤解・行き違い)の原因の解明

- (1) 「夫(日本人)が私(韓国人)にバッグを買ってきてくれたのよ。私はとってもうれしくて、『うれしい、うれしい』ってはしゃいでいたの。そうしたら彼は『ありがとくらい言えよ』と怒った顔をして言うのよ。おかしいでしょ？ 夫が買ってきたものにありがとなんて、まったく他人行儀じゃない。夫婦なのにな」(『続スカート』)

2. 待遇表現

2-1 日本語と韓国語の違い

- (2) (会社の客から電話を受けた秘書が)

- a. 사장님은 지금 안 계신데요.
b. 社長 は 今 おりませんが(？いらっしゃいせんが)。

- (3) (同じ会社の部長から電話を受けた秘書が)

- a. 사장님은 지금 안 계신데요.
b. 社長 は 今 いらっしゃいせんが。

- ◎ { 日本語の敬語 …… 相対敬語 (話し手, 聞き手, 話題の人, 三者の関係)
韓国語の敬語 …… 絶対敬語 (話し手と聞き手, 話し手と話題の人, 二者の関係)

◎丁寧度を決定する要因(聞き手に対する敬語用法の場合 → 荻野他1990)

- 日本語 ①家族をウチと見る ②家族以外は聞き手との社会的役割(先生・上級生)
韓国語 ①親族の場合は親族間の世代関係(親, 兄姉, 弟妹)
②親族以外は年齢差 cf. 軍隊, 会社

2-2 待遇法に関する誤解の事例

◎～てさしあげます

- (4) 私の知る日本人食堂店主は、日本へ来て間もない韓国人の店員を雇っている。この店員が「差し上げます」をよく使うのだと言う。最初のうちは言葉を知らないのだからと、あまり気にしないようにしていたと言うが、「明日、旅行に行くから」と言って「送って差し上げます」と言われたり、自転車のパンクを直して「手伝って差し上げます」とか言われているうちに、なんだか親切の押し売りをされているような感じがしてきたと苦笑いをしていた。(『スカート』)

(5) (学生が先生に向かって)

- a. 자세한 것을 아는데로 선생님께 알려 드리겠습니다.
- b. 詳しいことがわかり次第 先生に 知らせてさしあげます。(韓国語直訳)
- c. 詳しいことがわかり次第, 先生にお知らせします。

→ ~아/어 드리다 a/e tulita — 「~てさしあげる」

* 日本語「~てさしあげる」の使用条件

◎呼称

(6) 「学校で友だちから“李君!”と呼ばれて、はじめはひじょうにムツときました」と、韓国から来たばかりの学生はいう。(『ガイド』)

(7) 研究生であった留学一年目当時、イムは指導教官から「イムさん」と「さん」づけで呼ばれていた。その後、博士課程の試験に合格し、院生になってしばらくすると、指導教官はそれまでの「さん」づけの呼び方を変えて、「イム君」と呼ぶようになった。このことは日本人には、特に気にかかることでもないだろうが、当事者のイムは、この「さん」から「君」への変化に、ショックを受けてしまったのである。(任・井手(2000, 2004))

→ 日本語「~君」と韓国語「~군kun」

「おにいさん/おねえさん」と「오빠 oppa・형 hyeng / 언니 enni」

3. コミュニケーションスタイル

3-1 日韓のコミュニケーションスタイルの違い

◎質問の量, 順序 → 奥山(2000) (任・井手(2000, 2004))

- ・ 韓国人 - 相手に積極的に質問する。疑問詞疑問文の使用多い。왜を多用(日本人の4倍)。
- ・ 日本人 - 質問と答え同程度。真偽疑問文(Yes-No 疑問文)

↓

コミュニケーションスタイルの違い

韓国人の印象 - ストレートで攻撃的

日本人の印象 - 核心をつかない, 心を開いていない

3-2 ことば(態度)の有無(相手と表現)

◎感謝表現, 依頼表現

(8) 「夫が私にバッグを買ってきてくれたのよ。私はとってもうれしくて、『うれしい, うれしい』ってハシャいでいたの。そうしたら彼は『ありがとうくらい言えよ』と怒った顔をして言うのよ。おかしいでしょ? 夫が買ってきたものにありがとうなんて, まったく他人行儀じゃない。夫婦なのにね」(『続スカート』)

(9) あるとき, テーブルの上においてある日本人の友だちのたばこを無意識に取って1本吸うと, すかさず「それ, ぼくのたばこだけど…」と, あたかもたばこを盗まれたような顔で注意され, 気分を害したことがあります。しかし聞いてみると, 日本人の友だちも, 韓国人は黙って他人のタバコを吸うので, 気分が悪かったといえます。(『ガイド』)

→ 言葉(感謝, 依頼など)の有無 → 尾崎ほか(2004予定), 大塚(2004)

親しい間柄・親しくない間柄による

・ 目的達成のストラテジーの違い

ことばの有無, 行動の選択(携帯借りないで公衆電話), 行動の放棄(借りない)

◎謝罪表現

(10)知り合ってから1年以上になる韓国人の友人。週2回一緒に勉強しているのだが、いつも15分程度遅刻してきて謝らない。「あー」と言いながら手を振ってにこやかに現れる。その日はいつもより更に遅かった。すると、「私ね、ちゃんと時間通りに家を出たよ。でも乗った電車が反対方向だったの」と言い、やはり謝らなかった。

→ 謝罪の気持ちの示し方(言葉、態度)、謝罪すべきことか(道でぶつかる)

cf. 間違っていないのに怒られた →任・井手(2000, 2004), 彭 国躍(1990)

◎あいづち

あいづちの有無(任・井手(2000, 2004)), あいづちのタイミング(金秀芝(1993))

◎相手との距離(空間的, 心理的) →尾崎ほか(2004予定), 大塚(2004)

(11)研究室の前の廊下で、同僚の女性教師と話しをしていたときも、相手がどんどんこちらに迫ってくるから、私は一歩ずつ後ずさりする。すると、あちらは一歩前が出る。しまいには壁際に追いつめられてしまったこともある。(齋藤明美(2004予定))

→ 自分と相手の領域の保ち方

3-3 談話の中でのことばの使い方(状況と表現)

◎儀礼的表現, あいさつ的表現

(12)日本人の多くは外国人からみるといとも簡単に「家に遊びに来て下さい」と言う人たちのようである。私はかつてある教師から、親しげに「ぜひ、私の家に遊びに来て下さい」と言われて、さて、いつ行こうかと本気で考えていた。が、何日か後でその教師と偶然に会ったときに挨拶をすると「ええと、あなたはどなたでしたっけ?」と言われてがっかりしたことがある。(『新スカート』)

(13)知り合いの日本人家族と一緒に旅行に行った。日本人の方が車を提供し、宿泊費はこちらがもつことになっていた。旅行先で食堂に行き一緒に食べる時、日本人の方が「いただきます」と言った。私はそれを聞いて食事代はこちらが出さなくてはいけないのかと思い、大変だなあと思った。結局のところ、食事代は日本人が払ってくれた。

→ 儀礼的表現(状況との関係 実質的な表現になるか否か)

「毎度ありがとうございます。」「いつもお世話になっております。」

“많이 파세요. (たくさん売ってください。)”

“예쁘게 입으세요. (きれいに着てください。)”

3-4 話題の種類(状況と話題)

(14)韓国の人と話す時、初対面でも結婚しているのかとよく聞かれる。日本人ならそう言うことを聞くのは失礼だと思うのだが。まだだと答えると、中には、じゃあ、結婚相手を紹介してやろう、という人もいて笑ってしまう。

(15)私が日本の大学生であったころ、こんなことがあった。ゼミのクラスのメンバーで記念写真を撮ったときのこと。みんながカメラを前に並んでいると、ひとりの韓国人男子留学生が前列の椅子に座っている女子学生の前にやって来るや、「いやあ、こんなブスにはねえ、こうしなくちゃ」と言いながら、撮影のために用意した国旗を彼女の鼻先に広げて、彼女の顔を隠す真似をしたのである。その女子学生は一瞬あっけにとられたようだったが、すぐに彼の手を振り払うと憤然として席を立てて小走りに歩き出した。彼はあわてて「いや、冗談、冗談」と言いながら彼女を追いかけ、何度もわびて彼女を引き戻し、なんとか席に着かせた。日本人学生は「それは冗談にならないよ、ひどいよ」と口々に彼を非難する。(『新スカート』)

→ 話題の適当さ(何を尋ねるか, ユーモア感覚の差)

4. 非言語行動（ことば以外による伝達）

(16)韓国に留学した日本人女子学生に韓国人の男子学生がお茶を飲みに行こうとデートに誘った。行く気のない日本人学生は、「時間がない」とほほえみながら答えた。彼女の態度を見た韓国人学生は、脈があると思って、なおしつこく誘った。

(17)韓国人A君夫婦と日本人B君が喫茶店で待ち合わせをすることになっていた。A君とB君は約束の時間前に到着していたが、A君の奥さんはかなり遅れてやってきた。遅れてやってきたとき、奥さんは笑い顔をしながら近づいてきた。それを見て、A君はB君が気分を悪くしないかとひやひやした。

(18)知り合って1年以上になる韓国人の友人（女性）。一緒に歩いていると、私（女性）の腕に自分の手を回してくる。

→ 非言語行動の意味の違い（ほほえみ、頭をたたく）
身体接触に対する意識

5. 多文化比較の必要性

日韓比較 日本（日本人）はこうで、韓国（韓国人）はこうだ。

→ 違いを民族性の差と見る ⇒果たしてそうなのか。多文化比較の研究必要
馬瀬良雄ほか(1988)（あいさつ、距離感）、林建彦(1990)（自分の領域、断り方）、
橋元良明ほか(1992)（間接的発話行為）
新プロ「日本語」第2班(1999)（謝罪、身体接触、婉曲表現）、

<参考文献>

- 江川 清(1986)「言語行動の比較研究 一日独比較を中心に」『日本語学』1986-12 明治書院
大塚徹(2004予定)「日本人と韓国人の不快感の比較」『専修国文』
奥山洋子(2000)『質問と自己開示による情報収集の韓日比較 一大学生同士の初対面の会話資料をもとに
一』韓国・中央大学校博士論文
荻野綱男(1989)「対照社会言語学と日本語教育 一日韓の敬語用法の対照研究を例にして」『日本語教育』
69 日本語教育学会
荻野綱男ほか(1990)「日本語と韓国語の聞き手に対する敬語用法の比較対照」『朝鮮学報』136 朝鮮学会
西原鈴子ほか(1994)『在日外国人と日本人との言語行動的接触における相互「誤解」のメカニズム 一日
本語と英・タイ・朝・仏語の総合的対照研究一』(文部省科学研究費報告書)
新プロ「日本語」第2班国立国語研究所チーム(1999)『ビデオ刺激による言語行動意識調査報告書 分析
編』(文部省科学研究費報告書)
野元菊雄(1983)「言語行動学入門」『日本語学』1983-7
橋元良明(1992)「婉曲的コミュニケーション方略の異文化間比較 一9言語比較調査一」『東京大学社会情
報研究所 調査研究紀要』1
林建彦(1990)「日本人、韓国人、中国人の表現構造比較 一D.C.バーランド教授の日・米比較をベース
として一」『行動科学研究』30 東海大学社会科学研究所
彭 国躍(1990)「「謝罪」行動の遂行とその社会的相関性について 一日中比較社会語用論的視点から一」
日本言語学会大会資料
馬瀬良雄ほか(1988)「言語行動における日本・台湾・マレーシア（マレー系）の比較一大学生の挨拶行動
を中心に一」『国語学』155 国語学会
金 秀芝(1993)「日・韓両言語における「あいづち」の対照研究 一電話の会話を中心に一」『日本学報』
12 大阪大学文学部日本学研究室
任榮哲、井手里咲子(2000)「似ていて違う？ ことばと文化の日韓比較」『月刊言語』2000年7月号～12月
号
任榮哲、井手里咲子(2004)『箸とチョカラッ』大修館書店

<資料>

『続スカート』…『続スカートの風 恨みを楽しむ人びと』呉善花 三交社 1991

『新スカート』…『新スカートの風 日韓=合わせ鏡の世界』呉善花 三交社 1992

『ガイド』…『日本へ行こう 韓国人留学生のための日本生活ガイド '92-'93』今井久美也他 日本生活ガイド事務局 1992



- テーマ：「音声・音韻の対照言語研究の成果の活用」
- 趣 旨：音声・音韻の対照研究の成果を解説しつつ、日韓の言語間で起こりやすい音声・音韻上の誤解の事例を幾つか提供していただく。誤解や摩擦を最小限にとどめるための音声教育の在り方や、こうした知見の日本語教育現場での活用方法について、多様な観点から考える。
- 講 師：松崎 寛（広島大学講師） （敬称略）

松崎 寛（まつざき ひろし）

広島大学教育学部日本語教育学講座講師

専 門：日本語教育、音声教育、音声学

略歴等：筑波大学大学院修了。東北大学助手、東京農工大学留学生センター非常勤講師等を経て、1999年4月より現職。音声教育の実践と理論の統合を目指す諸研究を行っている。

主著書：『1日10分の発音練習』（くろしお出版、共著、2004）

「日本語の音声教育」『コンピュータ音声学』第5章（おうふう、2001）

「韓国語話者の日本語音声－音声教育研究の観点から－」『音声研究』3-3（日本音声学会、1999）

『よくわかる音声』（アルク、共著、1998） 他



<メモ>

音声・音韻の対照言語研究の成果の活用

松崎 寛 (広島大学教育学部日本語教育学講座)

hiroshim@hiroshima-u.ac.jp

1. はじめに

- 1) 対照言語研究を実際の指導に活用する方法を考える。
- 2) 基礎的研究と教育実践との関わりを、文法と音声の違いをふまえて考える。
- 3) 対照言語研究以外の、教育のための基礎研究として重要な関連領域について考える。

事例：来週から韓国人 3 人に発音を教えることになったので、韓国人が苦手な発音について本で調べた。『言語学大辞典』を見たが、難しい用語や記号が多くてさっぱりわからない⁽¹⁾。もっと努力して他の本も調べてみたが、書いてあることが本により違う⁽²⁾。でも多くの本に無声・有声の区別が苦手とあったので、最初の授業では清濁の練習をやる⁽³⁾。

当日、自己紹介をしたところ、Aさんはやはり清濁を間違えた。なるほどこれが「母語の干渉」だな⁽⁴⁾。でもBさんCさんは、あまり清濁に問題がなかった⁽⁵⁾。その後、用意してきた例文で練習したが、Aさんだけなかなか直らなくて、つらそうだ⁽⁶⁾。

2. 対照言語研究の有効性

巻末資料は、先行研究における韓国語話者の発音上の特徴を表にしたものである。大まかに分けて、①カサタバ行とガザダバ行、②ザ行・/ツ/, ③ハ行、④マ行・ナ行、⑤ラ行、⑥母音、⑦促音・長音、⑧撥音、⑨アクセント、⑩イントネーションとなる。このように発音上の問題点を母語別に押さえておくことによって、上記 1 の事例のように、教えるべき項目を前もって決めておくことができる(事例③)。

しかし、韓国語なら何とかなっても、ほとんどの本に載っていないような母語の学習者が来たらどうするか(事例①)。また、巻末資料のように、文献により記述に違いがある場合はどうしたらいいか(事例②)。また、多くの文献では、誤用の原因として多くの研究では、韓国語での対立の仕方が日本語と異なることをあげるが、実際の学習者に誤用が観察されない場合、個人差だと片付けてしまうだけでいいか(事例⑤)。また、「何を教えるか」が決まった後の「どう教えるか」について、対照言語研究から、どのような知見が得られるか(事例⑥)。上記の説明では「教えるべき項目を前もって決めておく」のに対照言語研究が役に立つと述べた。しかし、それは本当だろうか。

A：韓国語は破裂音の無声・有声で意味を区別しないので、清濁の聴取・発音が困難

という「予測」がある。これは、当たっているようで実ははずれている。聴取テストでは、韓国人は語中の無声音・有声音をそれほど誤らないのだ(松崎 1999:29)。これは、

B：韓国語には「平音・激音・濃音」の3種がある。語中で平音は有声音となるが、濃音や激音は無声音なので、聴取では、語中の濁音＝平音、清音＝濃音と知覚される

ためだが、このB説は、実験で確認された事実以後から付けた理由でしかない。では、すべての正用・誤用を母語に結び付けて論ずることの教育学的意義とは何だろうか。

…誤用の原因を母語の干渉だと断定することはできないし、また、そう断定して、「母語の干渉は根強く残るからしかたない」と諦めるのでは、全く意味がありません。(中略)「どうすれば発音がよくなるか」と考えると、結局、発音・聞き取り練習をし、教育的に有効な説明を加え、誤りが何度も生じるなら、練習を何度も繰り返すこととなります。つまり、誤りの原因が母語の干渉かどうかで、指導法が180度変わるわけではないのです。

(松崎・河野 1998:174)

対照分析→誤用分析→中間言語研究、という一連の研究史の流れの中で、近年では、学習者の文法習得研究の成果を音声に援用した研究も、多く見られる。だが、教室環境学習者を対象とした習得研究における、「文法」と「音声」の最大の違いは、

「文法は体系的方法によって教えられるが、音声はその場その場の誤用指摘しかされない」という点である。教室環境学習者は、自然習得学習者に比べ、習得速度の点で速く、到達レベルが高くなると言われる。発音も、体系的学習により、指導を受けない学習者が何年もかけて習得したレベルに、効率的に到達できる可能性、あるいはより高いレベルに到達できる可能性がある。「音声は上級になっても母語の干渉が…」という分析も、見直しが必要になるかもしれない。

3. 指導のアイデア集

「現場で役立つ対照研究」に期待されるのは、「誤りを把握し、原因を探る」ことを研究課題の核とするのではなく、一歩進めて、「負」を「正」に変えるような何らかの方法を、異音レベルでの分析から引き出せないかということである。学習者自身も気づかない、母語に生じる「余剰的特徴」を目標言語の音韻習得に利用する方法が提案できないか。

韓国語…語頭濁音平音で代用すると、「ビール」は/ビール/となってしまう。そこで「お」をつけて/おビール/のように語中にし、声帯振動を様々な方法で確認する。そして、/お…ビール/のように間をあけたり、心で/お/と言った後、/ビール/と発声させたりする。

中国語…①「的」「吧」などの「軽声」は有声化しやすい。②高く平らな「一声」では無声音に、低く平らな「三声」では有声音になりやすい。これを利用して、アクセントの高低配置が清濁と一致する語を用いて練習し、無理やりOKの状態を体感させる。

母語の余剰的特徴を、目標言語での弁別素性へ「繰り上げる」作業は、どの程度困難なのか。発音・聞き取りテストの得点や、学習者の発音学習行動の変化を分析した実証的データが必要であるが、ここに、基礎研究と教育現場での実践を結ぶ橋渡しが期待できる。

第3言語、つまり学習経験のある外国語や方言の知識も活用できる。

- ・「ジャジュジョ」「ザズゾ」の発音の区別ができる韓国人のコメント「英語の「d₃」と「z」のイメージで区別しようとする」(小河原 1998:125)。
- ・「ザズゾ」を「ヤユヨ」と発音するベトナム南部の学習者に対し、「カラオケで歌うときみたいに、ハノイの言い方で」と指導する(黒田 2002:42)。

ところで、たとえば母音の無声化を指導するのに、学習者の母語のどんな語に無声化が生じるかを調べ上げ、それを教育への提言とする研究もあるが、仮に、「ナイショ話のささやき声で」「シーッっていうときの音で」のような説明で、あらゆる学習者に指導の効果があるのだとしたら、基礎的研究の成果を待つよりも、このほうがはるかに効率が良い。

このような「アイデア」は、「良い学習者」を観察することでも引き出せる（「事例」⑤）。

中国人A「(あたま)「た」「だ」聞き取りは難しい。でも注意すれば発音することはできる。「た」の方は舌を少し上の方に曲げ、「だ」の方は舌を曲げずにまっすぐにして発音する。」

中国人B「(ゴルフ) ゆっくり話す時は言い分けることができるし、聞き取ることもできる。「ゴ」の時は舌が後ろの方に来て、「コ」の時は前に方にくる。」 (瀬野 2001:19)

破裂音の舌位置は、無声・有声で大きく異なるわけではない。無声音で舌が張り(tense)、有声音で緩む(lax)こと、つまり緊張度の違いを適切に表現できなかったのだろうか。発音学習方略を他学習者に転移することの有効性については、追究すべき課題が多いが、奇しくもこの表現は、高橋(1989)が述べた、中国人学習者に対する指導方法の説明と重なる。

T「(自分ののどの上部を指して) カキクケコ……上です。(のどの下部を指して。鼻濁音にはせずに) ガギグゲゴ……下です。」 聴解は別として、個人における清音、濁音の言い分け、声帯の振動の違いの体得はこれでかなり解消できる。 (高橋 1989:240)

学習者にこの「適切な基準」を形成させる方法だが、小河原(1998)は、学習者に「評価札」を持たせて教室外学習者の発音、自分自身の発音、教室内の他学習者の発音を評価させ、「適切な基準による自己評価に基づいて自己修正させる」練習を行った。その結果、学習者の発音、自己評価能力、発音学習動機等が、コース前より有意に向上したという。発音評価活動は、修正能力の育成のみならず、発音不安の軽減という情意面の効果もある（「事例」⑥）。



図1 聴き取り練習 (小河原 1998)

図2 教師評価 (小河原 1998)

図3 他者評価 (小河原 1998)

【参考文献】

- 小河原義朗(1998)『外国人日本語学習者の発音学習における自己モニターの研究』東北大学文学部博士学位論文
 河野俊之(1993)「日本語教育における音声教育とその研究の目標」『ことばの科学』6, 名古屋大学言語文化部
 黒田朋斎(2002)「世界の日本語事情 ベトナム編」『月刊日本語』3月号 アルク
 瀬野牧子(2002)『発音上の問題指摘が学習者に及ぼす影響』平成13年度広島大学教育学部卒業論文
 高橋ゆり(1989)「中国帰国者のための音声教育シラバス」『日本語教育』68号
 松崎寛(1999)「韓国語話者の日本語音声—音声教育研究の観点から—」『音声研究』3-3, 日本音声学会
 松崎寛(2001)「日本語の音声教育」『日本語教育学シリーズ第3巻 コンピュータ音声学』第5章, おうふう
 松崎寛・河野俊之(1998)『よくわかる音声』アルク

- テーマ：「異文化間カウンセリングの活用 -判断留保（エポケー）の実践-」
○趣 旨：日本語教育現場で不可欠な実践力の一つである「相手の話を十分に聞く力
や話を引き出す力」を身につける際に有効な方法の一つである判断留保の
技法について紹介する。
○講 師：渡 辺 文 夫（上智大学教授）（敬称略）

渡 辺 文 夫（わたなべ ふみお）

上智大学文学部教育学科教授

専 門：異文化間心理学，異文化教育

略歴等：上智大学文学部卒，上智大学大学院文学研究科修士課程修了。米国
東西センター文化学習研究所専門研究員，フィリピン大学大学院上
級講師，フィリピン心理学研究研修所異文化関係部門部長，東北大
学文学部助教授などを経て，1997年10月から現職。現在，異文化
間教育学会理事。2001年度から「日本語ボランティア活動支援・推
進事業委員会」（文化庁委嘱事業）主査を務めている。

主著書：『異文化のなかの日本人』（単著：淡交社）

『異文化と関わる心理学』（単著：サイエンス社）

『異文化接触の心理学』（編著：川島書店）

『国際化と異文化教育』（編著：至文堂）他



<メモ>

<メモ>

[渡辺文夫 2002 異文化と関わる心理学 サイエンス社より抜粋]

●「統合的関係調整能力」の課題

「統合的関係調整能力」の育成で課題となるのは、次の三つの点です（渡辺 2000）。

①「関係」が変わることによって認識や行動が変わること、②「関係」優位な認識を持ち行動をすることによって異文化関係の問題に効果的に対処できること、③これら二つを学習者の全体的な意味づけのなかで統合的に「構成」すること。少し専門的な言い方で説明すると①は、「異文化接触では主観と客観が乖離していても『関係』は独立し機能する」という命題を学習すること、②は、「対人的な相互関係を活性化することによって効果的な異文化間行動が行なえる」ことを学習すること、③は、「①と②を学習者が自らの意味づけにおいて構成し、統合的に経験的に学習する」ことです。①と②に関しては、現象学的な考えを、③に関しては構成主義 (Constructivism) 的な考え方を基盤に置いて方法を開発しました。

2. 統合的関係調整能力育成のための教育実習法

1) 現象学に基づく異文化教育法

●エポケー実習：判断留保の訓練

エポケー (Epoch) 実習は、上で述べた①「『関係』が変わることによって認識や行動が変わる」ことを経験的に学習する方法です。エポケーというのは、現象学の中核にある認識のための意識操作の方法です。通常は判断停止あるいは判断中止と訳されますが、ここでは判断留保と訳すことにします。この意識操作の方法は、自らが認識しているものや事象が自らと離れて客観的に存在していると考えず、その認識を絶えず括弧のなかに入れ、より慎重に知ろうとする認識の方法です。認識した物事や事象が、絶えず新たな姿で認識されるようになります。

エポケー実習は、以下に示した順序で行われます。

【エポケー実習の手順】

1) 第一ステップ：絵を描いての実習

- ・二人一組A Bのペアを作る。
- ・「自分にとって大切なこと、もの、ひと」を絵に描く。
- ・Aは、Bに自分の絵を説明する。
- ・Bは、Aの説明を聞き、「あなたは、～を大切に感じているのでしょうか？（上あがりの口調で）」と自分の理解を断定せずに、共感的に慎重に「確かめる」。この時、質問や自分の考え、思い、判断、意見などを言わない（いったん意識の脇に置く）。[ここでの一連の意識の作業がエポケーになる。]
- ・Aは、Bの「確かめ」を聞き、さらに話を続ける。
- ・Bは、さらにそのAの話を「確かめる」。
- ・話が収束するまでこれを繰り返す。
- ・講師は、AにBから「確かめ」を受けてどのように感じたかを発言させ、その発言に対してエポケーをし「確かめる」。

2) 第二ステップ：話題を設定しての実習

- ・二人一組A Bのペアを作る。
- ・話題（たとえば「海外派遣の自分にとっての意味」など）を提示する。
- ・Aは、Bに話題についての自分の考え、気持ち、思いを述べる。
- ・Bは、Aの説明を聞き、「あなたは、～を意味があると感じているのでしょうか？」と自分の理解を断定せずに、共感的に慎重に「確かめる」。この時質問や自分の考え、思い、判断、意見などを言わない（いったん意識の脇に置く）。
- ・Aは、Bの「確かめ」を聞き、さらに話を続ける。
- ・Bは、さらにそのAの話を「確かめる」。
- ・話が収束するまでこれを繰り返す。
- ・講師は、AにBから「確かめ」を受けてどのように感じたかを発言させ、その発言に対してエポケーをし「確かめる」。

(渡辺 2000)

エポケーとは

渡辺 文夫
(上智大学)

Epoch (エポケー) は、「判断中止」あるいは「判断停止」と訳されます。ケンブリッジ哲学事典を見ますと、「私たちが、現象学的な姿勢をとる時に、自然な姿勢の行為、意図、確信を留保します。このことは、疑ったり否定することではありません。距離をとりその構造を凝視し熟慮する事を意味します。フッサールはこの留保を現象学的なエポケーと呼んだ」と説明されています。生きている限り判断することは止みませんので私は、「判断留保」の方がそもそもの意味に近いのではないかと考えています。

自らが認識しているものや事象が自らと離れて客観的に存在していると考えず、その認識を絶えず括弧のなかに入れ、より慎重に知ろうとする認識の方法です。認識した物事や事象が、絶えず新たな姿で認識されるようになります。

異文化接触では、主観と客観の乖離が大きく、本質の理解よりも先に関係優位の姿勢が大切になると思われれます。エポケーは関係優位の姿勢をとるための優れた意識の操作法であると私は考えています。

○テーマ：「年少者の日本語習得について考える」

○趣 旨：近年、日系南米人など家族を伴って我が国に定住する外国人が増大している。親と共に来日した子供たちは自分の第一言語（母語）と第二言語である日本語の言語・文化の狭間でさまざまな異文化体験をする。その場合どのような体験が子供たちの日本語習得にとって有効に作用しているのか、具体的な事例に触れながら、最適な言語環境とは何かについてバイリンガリズムの観点から考える。

○講 師：中 島 和 子（名古屋外国語大学教授）

（敬称略）

中 島 和 子（なかじま かずこ）

名古屋外国語大学外国語学部教授・日本語教育センター長

専 門：バイリンガル教育，日本語教育，継承語教育

略歴等：国際基督教大学学部・大学院を経て，トロント大学大学院修了。トロント大学東アジア研究科教授を経て，2002年度より現職。

主著書：『バイリンガル教育の方法』（アルク，2001）

『ことばと教育』（海外子女教育財団，1998） 他



<メモ>

<メモ>

「年少者の日本語習得について考える」

第4分科会では、年少者の日本語習得について、話し合いを交えながら次の3点に焦点を当てて考えてみたいと思います。

1. バイリンガリル育成を目指した外国人児童生徒の日本語習得の在り方
 - a. バイリンガリル育成とは？
 - b. 言語形成期の子どもの言語習得の特徴
 - c. 外国人児童生徒が置かれている言語環境
 - d. 理論的背景(2言語の相互関係)
 - e. 予想される2言語低迷型への対処

2. 実際にどう日本語を習得していくのか(国内で収集したデータに基づいて)
 - a. 小・中学生の場合
 - b. 幼児の就学体験との関係
 - c. 親・保護者の態度と日本語習得度

3. 母語・母文化の役割と親を巻き込んだ2言語の伸ばし方
 - a. 母語の価値づけと日本語習得との関係
 - b. 家庭文化とアイデンティティー
 - c. 聞き役としての親の教育参加
 - d. 海外子女教育の知見を生かした親・保護者の啓蒙

Ⅲ. 実態調査から (1)

■ 国立国語研究所の調査 (1997～2001)

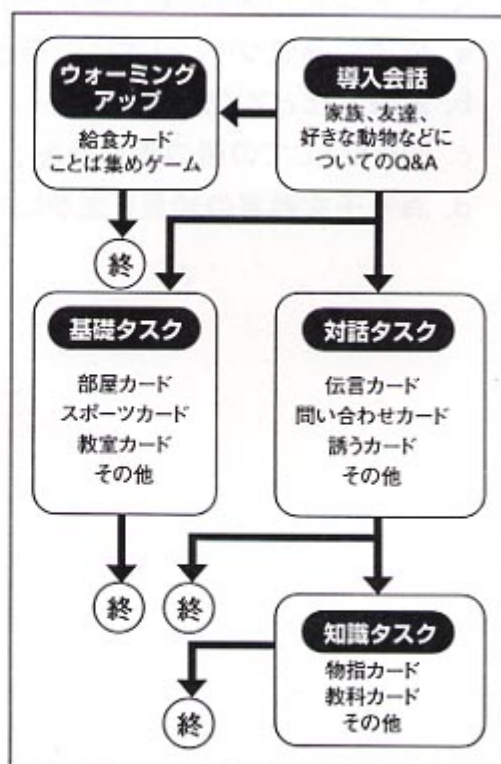
- 全国公立学校の小中学生
- ポルトガル語話者：242名
- 中国語話者：160名

■ バイリンガル会話力調査

- 日本語会話力
- 母語会話力

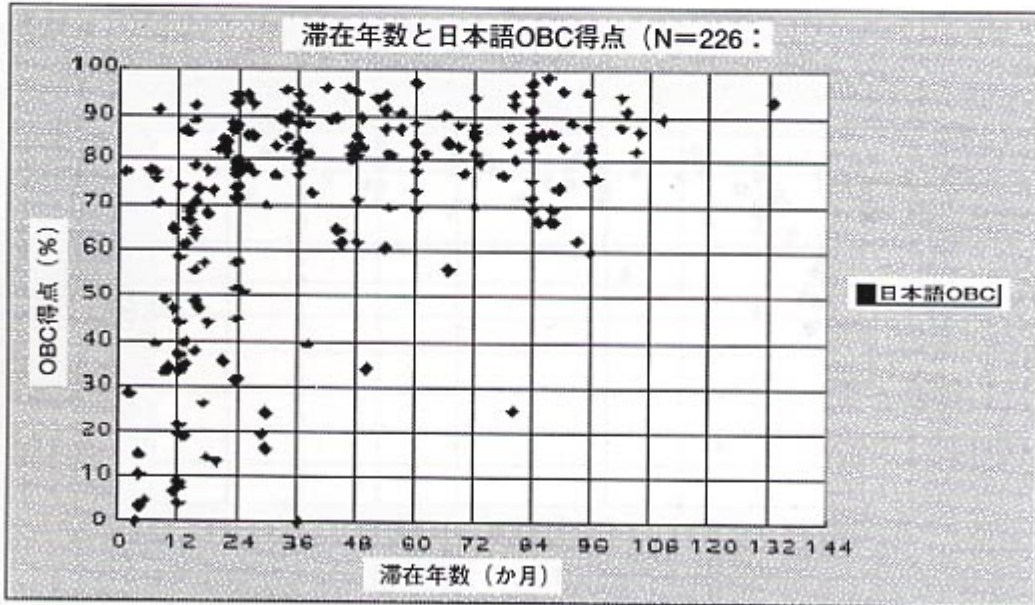
Ⅲ. 実態調査から (2)

■ 会話力の三面



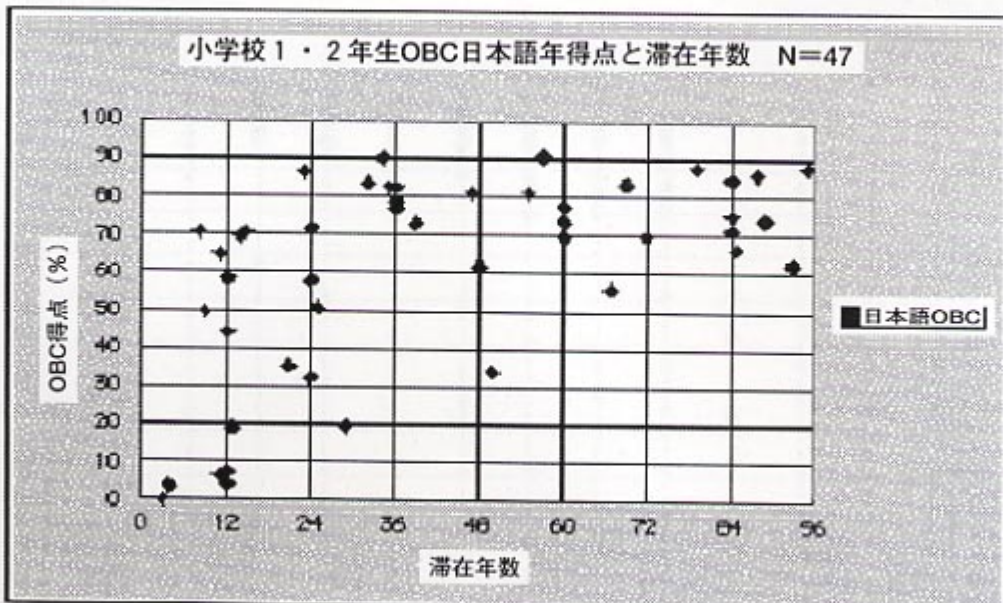
Ⅲ. 実態調査から(3)

- 日本語会話力がどう伸びるか



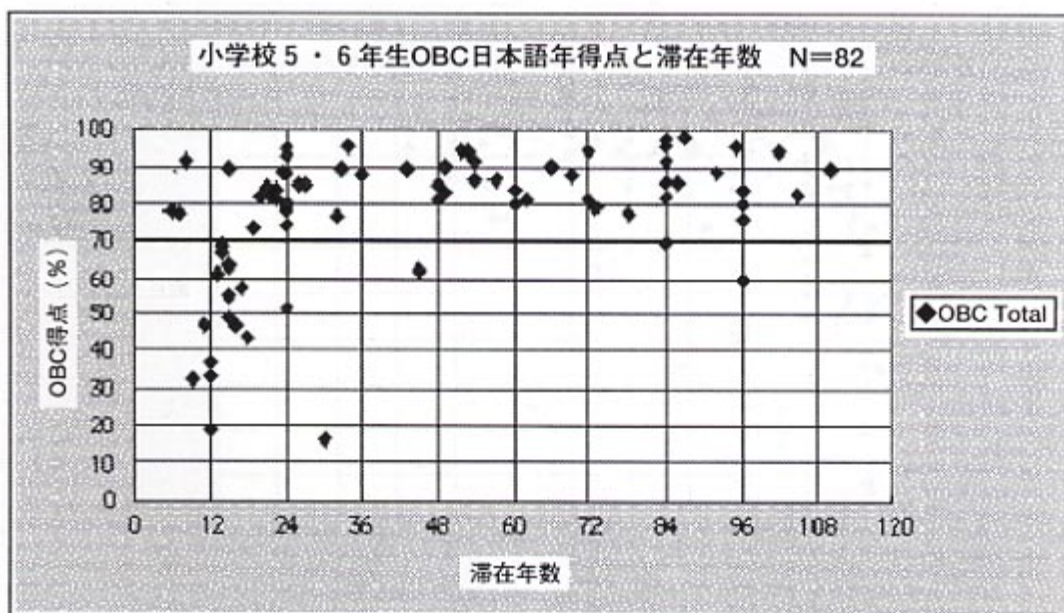
Ⅲ. 実態調査から(4)

- 低学年の場合 (小1, 2)



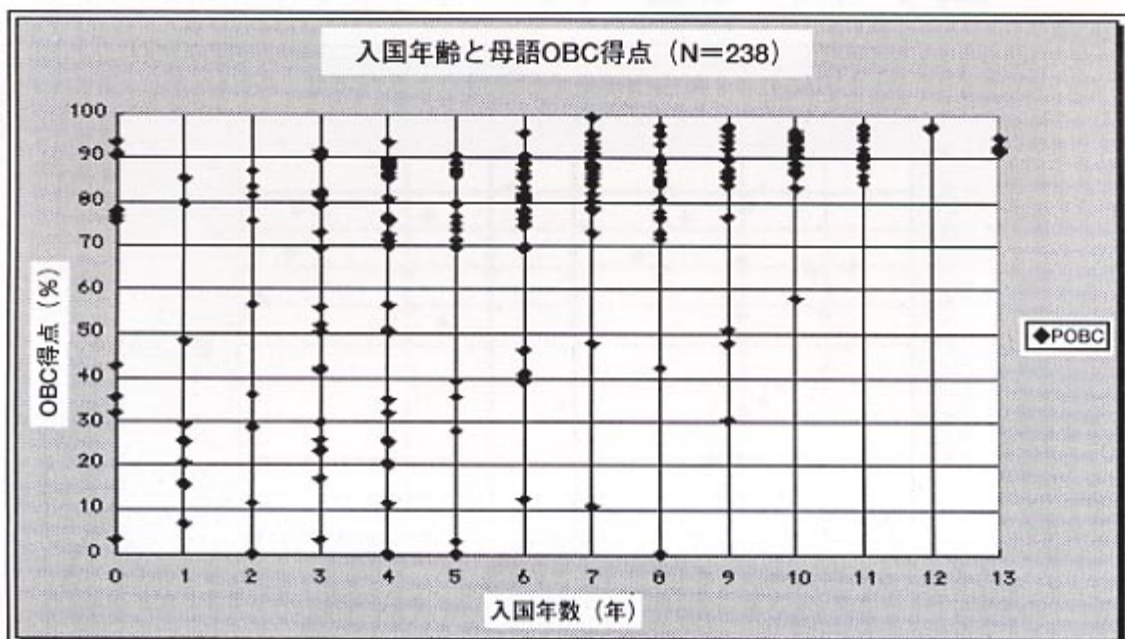
Ⅲ. 実態調査から (5)

- 高学年の場合 (小5、6)



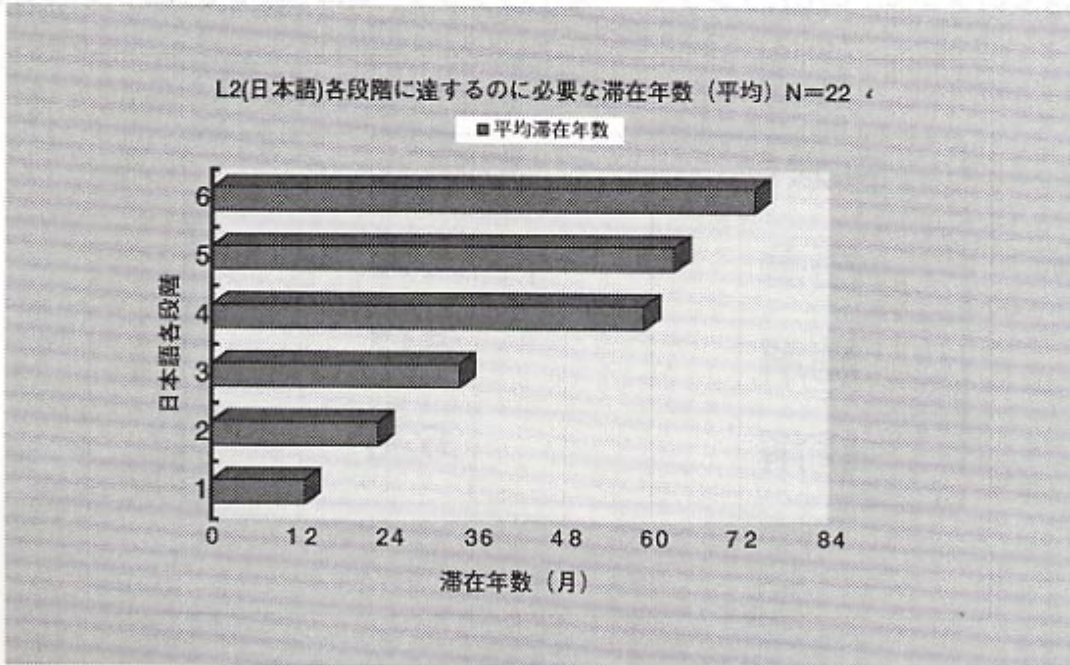
Ⅲ. 実態調査から (6)

- 入国年齢とポルトガル語 (会話力)



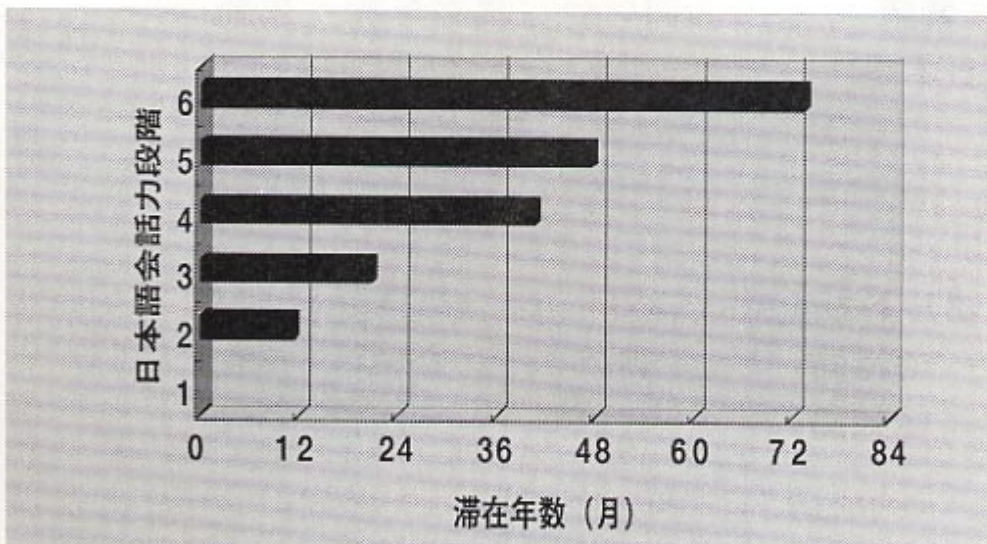
Ⅲ. 実態調査から (7)

- 会話力習得にかかった時間 (ポ語話者)



Ⅲ. 実態調査から (8)

- 会話力習得にかかった時間 (中国語話者)



Ⅲ. 実態調査から (9)

■ 会話力と読解力、聴解力、語彙力との関係

日本語	相関 (128名)
語彙	.617
聴解	.517
読解	.520

Ⅲ. 実態調査から (10)

- 会話力と入国年齢、滞在年数、年齢との関係

言語	入国年齢	滞在年数	年齢
日本語	.170*	.470*	.337*
対話面	.152**	.428*	.318*
認知面	.216**	.520*	.324*
ポルトガル語	.457*	.381*	.299*
対話面	.432*	.329*	.337*
認知面	.491*	.374*	.362*

**P<.01 *P<.05

Ⅲ. 実態調査から (11)

- 語彙、読解力と三大要因との関係

言語	入国年齢	滞在年数	年齢
日本語			
語彙	.272*	.621*	.362*
読解力	.083	.455*	.453*
ポルトガル語			
語彙	.547*	-.507*	.269*
読解力	.627*	.355*	.521*

**P<.01 *P<.05

Ⅲ. 実態調査から (12)

■ どんな会話力を持っていたか (ポ語)

両言語高度	22.5%
両言語低迷	11.0%
ポルトガル語優位	19.1%
日本語優位	19.1%

Ⅲ. 実態調査から(13)

■日本語会話力の伸びと親の態度(ポ語)

1 滞在年数	.352
2 ポルトガル語会話力(認知面)	.460
3 子どもの日本語への親の期待	.531
4 子から親への日本語使用	.608
5 ポルトガル語で読書	.645
6 日本語でテレビ	.677

Ⅲ. 実態調査から(14)

■望ましい親の態度

- 両方のことばが大事(二者択一的に見ない)
- 親の日本語使用は大きなプラスではない
- 親の日本語使用は母語には大きなマイナス
- 親の文化と言語を家庭で守る
- 日本の学校をプラスに評価

Ⅲ. 実態調査から(15)

■9歳ぐらいを分水嶺にして...

- ◆母語未熟（幼児、小学校低学年）
 - 母語の後退、喪失が速い
 - L 2 が伸び悩む
 - 使い分けが大事

- ◆母語成熟（小学校高学年、中・高）
 - 母語保持可能
 - バイリンガル・アプローチ可能

大阪大学吹田キャンパス 構内図



※コンベンションセンター内での喫煙及び飲食は、1階ラウンジコーナーでお願いします。